

書 評

淡野明彦 (2004)

『アーバンツーリズム－都市観光論－』

古今書院、2004年、140p.

白 坂 蕃\*  
Shigeru SHIRASAKA

都市は、その発生以来、ひとびとが観光対象としてとらえてはきたであろうと思われる。しかしながら、都市の機能は、商業や交通の集積に始まり、さらに工業が加わり、それらの中心性の高まりは、政治的、文化的な機能を増幅させたが、いわゆる「観光」が都市の有用な、そして本来の機能として認識されることは、近年までなかったように評者（白坂）には思われる。

S. Page (1995)は『Urban Tourism』において、次のように述べている。「大都市は世界中のどこにおいても、重要な旅行先であり、外国からの観光客にはゲイトウェイであり、宿泊の場であり、さらには地方への旅の起点としての機能をもっている。しかしながら、観光に関する研究は、都市を無視してきた」。

ところが、1970年代以降、西ヨーロッパ社会では、生産と労働を中心とした、伝統的価値観が揺らぎはじめた。そして、その対極にあるツーリズムへの関心が高まった。ここで取り上げる、いわゆる「都市観光」もそうした大きな社会の潮流の一端である。つまり、1970年代以降、とくにヨーロッパ諸国では、都市政策において、ツーリズムは重要な課題として取り組まれてきた。「日本でも東京都や近畿圏においても、21世紀のリーディング産業として観光への積極的な取り組みが進んでいる。しかし、関連する講演会やシンポジウムに参加して、その進み具合をみると、まだまだ掛け声のわりには実がともなわないという感じをもっている。その一因としては、観光そのものに対する認識の浅さがあるように思われる」（本書の序）。いろいろな意味で、筆者のこの認識は正しい。

評者としては、常日頃、「ツーリズム」を「観光」と同義語であるとは考えにくいと思っているが、こ

では深入りしないでおく。

ところで、1960年代の半ばに、評者は、次のような大学教育をうけた。

元来、学問と言うものは、すでに起こってしまった事象について、それがなぜ起こったか、その辿った経過が、なぜそうなったのかを論理的に説明することを目的とするものである。起こってしまったことの説明をするのが学問である。論理的に、矛盾なく説明、記述ができればそれで終わりである。その研究活動のなかには、将来に対する予測は含まれていない。つねに現状説明という後ろ向きの仕事である。話はすべて推論である。その推論が論理的であれば、説得力を持つ。

そこで、将来についてゼミで発表したりすると、「きみはいつから村長になったのだ」と、先生から嫌みを言われたものである。

したがって、評者は、とくに求められない場合を除き、いわゆる提言の類いの研究は、厳に慎んできた。

しかしながら、昨今の観光の状況や日本政府の観光政策をみていると、観光の地域的展開やその要因についてよく知っている地理学者が、もっと観光の将来や観光開発について、ひろく巷間に発言しなければならないと考えるのは、筆者ひとりではないと考えている。

そんな矢先に、本書が公刊された。

筆者の淡野明彦（1947年生れ）は、すでに観光地理学に関する論文や著作がおおくある観光地理学界の重鎮で、2004年現在は奈良教育大学の副学長をつとめている。これまで、彼の研究の中心は、海岸地域の観光地化にあり、それを題材にして、観光地域の一般的な形成の諸条件を明らかにすることに主眼があった。しかし、彼は一転して農山漁村の対極にある都市

\*立教大学／観光学部および大学院観光学研究科・教授

観光に関心をもち、以下に述べるような、きわめて興味深い視点を示した。彼のたゆまぬ努力と慧眼に敬意を表するものである。

ところで、本書は、「当初には、S. Page (1995) の Urban Tourism の翻訳として観光することを考えていた。いざ訳出してみると、筆者 (S. Page) が教科書的内容と述べているものの、かなり専門的な内容で、しかも日本の地理学の研究では議論されていない面が多く、本書 (この『アーバンツーリズム』) が対象とする読者層には、とても受け入れられる内容ではないことがわかった。そんな理由で予定を変更して、書き下ろすことにした」。

「本書は、研究室にこもりがちな研究成果を、社会に活用できることを強く意図して書いたものである。したがって、たいていの学術書でみられる長々とした研究史で始まるといった構成をやめ、アーバンツーリズムに関心をもっている読者に対して単刀直入な構成(序)」となっている。

本書は、観光というものの基本的な考え方、そして都市における観光の展開についてどのように理解したらよいかについて、多くの事例をあげながら、わかりやすく説明している。

本書は、おおきく6つの章からなる。順次、その概要を紹介する。

## 第1章:アーバンツーリズムの意義

この章は、観光の定義と意義/アーバンツーリズムの定義と意義の二つの小項目からなる。アーバンツーリズムの定義については、観光の一般的な定義に「都市」という場所の限定を加えた程度で、「都市において行われるツーリズム」と、ごく簡単に定義している。

「都市は、都市内外からの観光客によって、経済的に潤ってきたにもかかわらず、都市計画者や商業者、地方自治体はめったに観光を都市経済の中の重要な要素であるとは考えてこなかった。またアーバンツーリズムに関するリサーチが無視されているために、公的機関は都市への観光を理解するための詳細なリサーチに対する必要性を検討してこなかった (Page, 1995)」という。しかしながら、東京を例にすれば、評者の経験では、都市内部の商業者などは、早くから外国人観光客をターゲットにした店舗を展開してきたにもかかわらず、観光の重要性が、行政などに認識されなかったのは、都市の研究者が都市構造などに分析の視点を持ち、観光に対する視点を示さなかったからであろう

と思われる。いつの時代にも、認識するという行為なしに、視点は示されない。

筆者は、ロンドンの例をあげて、「これまでの都市の産業の主体であった工業が衰退し、その結果として人口が減少し、商業が衰退し、居住環境が悪化するという一連の問題に対する解決策として、アーバンツーリズムが脚光を浴びるようになった」と述べている。そして、都市経営にアーバンツーリズムを構造的に導入したウェリントン (ニュージーランド) の例をあげて、単に観光そのものの直接的な経済効果に期待するだけではなく、観光を通じた都市の創成ともいうべき壮大な意義を、アーバンツーリズムはもっていることを指摘している。

## 第2章:アーバンツーリズムへの期待

本性では、東京都におけるアーバンツーリズムの政策化/近畿圏におけるアーバンツーリズムへの動きの二つについて述べている。

欧米の大都市では、1970年代後半から、都市政策としてのアーバンツーリズムに取り組んできた。東京都は、「東京構想2000-千客万来の世界都市をめざして-」(2000年)の構想を発表し、「東京の魅力を活かし、観光の振興を図る」、「東京の魅力を発信し、世界の人びとが交流する都市にする」ことをうたった。

東京都は、これまで海外に向けて積極的な観光情報を発信したり、統一した観光地図などもなく、観光の原点ともいうべき、基礎的な情報提供にさえ取り組んでこなかった。東京都の自治体としての観光政策は、従来は伊豆諸島や奥多摩地域であったから、政策の大きな転換だといえる。2001年に東京都は「東京都観光産業振興プラン」を策定し、従来、約280万人の観光客を、5年間で600万人にする数値目標をかけた。本書は、このプランについて、その全体像を紹介しながら、アーバンツーリズムにおける行政の重要性を説いている。

さらに、近畿圏における「Welcome Kansai 21-関西・広域ツーリズム戦略-」(2000年)をはじめ、大阪や京都でも、都市観光への取り組みがはじまったことを紹介している。

## 第3章:アーバンツーリズムの現況

本章では、日本国内におけるアーバンツーリズムを、日本人と外国人に分けて考察している。

「国民の観光に対する動向調査」(2000年までは隔年、2000年以降は毎年実施)によれば、宿泊を伴う

観光旅行への参加率は53.8% (2001年度)で、これは年間、約6,800万人が宿泊観光旅行に参加したことになる。この調査では、旅行先は調査されていないので、アーバンツーリズムへの参加を特定することはできない。しかしながら、この調査は「旅行先での行動」について回答を求めている、それからアーバンツーリズムの量を推定することは可能である。31にわたる「旅行先での行動 (複数回答)」のうち、「都会見物 (参加率4.5%)」はハイキングやスキーよりも参加率が高い。また1992年から2001年の10年間で、「都会見物」は1%増加したが、神仏詣やスキーが減少し、アーバンツーリズムが台頭してきているともみられる。

東京都は、アーバンツーリズムの観光客数が、多分、もっとも多数にのぼるものと推定される。残念ながら、それを裏付けるデータは存在しない。

筆者は、東京を訪れた観光客の行動を、いわゆる「はとバス」の定期観光ルートから推測している。東京は、その歴史性ゆえに、多くの著名な観光スポットをもち、また世界の大都市として時代の先端をゆくダイナミックさもある。「はとバス」のツアーは、観光客の東京に対する多様な欲求を反映しているとも考えられる。

どのような事物が、観光資源として評価されているかについて、定量的なデータがないので、本書では、株式会社山と溪谷社の「歩く地図」シリーズを用いて類推しているが、公式データの不足から、分析が進んでいない印象をうける。

一方、訪日外国人観光客については、観光白書や国際観光振興機構 (かつての国際観光振興会 JNTO) などのデータから、外国人の日本でのアーバンツーリズムへの関心が読み取れる。外国人観光客の都道府県別訪問率 (JNTOのデータ、2001年) では、当然のことながら、東京都、大阪府、京都府に高い。これには、国別、地域別の違いはみられない。東京については、新宿、銀座、浅草、渋谷、秋葉原が上位を占める。評者の知っているフランス人の建築家は、「新宿の歌舞伎町の夜ほど、魅力的な景観は世界にない」といって、評者を驚かせた。

#### 第4章: 観光地域の成立の条件とアーバンツーリズムの構造

本章では、まず観光地成立の一般的な条件と観光の構造を概観し、アーバンツーリズムの構造をとらえようとしている。

筆者は、観光地域が成立するための三つの基本的条

件をあげている。

- ①観光対象となる資源的な基盤と、観光を受容する社会経済状況の存在。
- ②観光開発を意図し、そのために必要な行動をとる主体の存在。
- ③インフラストラクチャーの存在と観光化する地域における地理的慣性。ここでいう地理的慣性は、自然環境の条件といってよい。

筆者は、一般的な観光の構造を分析し、観光市場、観光行動、観光対象、開発・管理の主体、インパクトの管理をキーワードとして、アーバンツーリズムの構造を説明する。

#### 第5章: アーバンツーリズムの成立への課題と取り組み

本章は、本書のほぼ二分の一のページ数を占めている。アーバンツーリズムの多くの事例をあげて説明しており、まず「都市の観光的魅力」について述べ、「計画/管理システムの組織化」、「インフラストラクチャーの適合」、「観光と他産業とのリンク」、そして「都市環境との調和」で締めくくりとしている。

「都市の観光的魅力」では、「何を集客の対象とし、それによって都市がどのような仕組みで活性化するか」という明確なプロセスが描かれなければならない」と筆者は主張する。たとえば、ヨーロッパの南北の中間に位置し、その環境を利用し、観光による誘客に加えて、「会議都市」としての性格を打ち出したりヨンの例をあげて、具体的に説明している。さらに、事例研究1として、「ウィーンにおける博物館地区 (Museum Quartier) の形成」について取り上げている。都市の魅力は観光対象として評価するにあたっては、人びとのニーズとどのように対応させるかを明確にして、アーバンツーリズムを意図する側の概念 (コンセプト) を明確化しなければならないと筆者は考えている。またニーズについては、観光者の属性の検討の必要性にも言及している。事例研究2「パリにおける Histoire de Paris キャンペーン」では、パリにおける歴史の見せ方を紹介している。さらに、観光資源の評価、観光資源の組み合わせについて、示唆に富んだ考え方を披瀝している。

「計画・管理システムの組織化」では、Butler (1980) の「観光地のライフサイクル」を紹介しつつ、熱海や大型のテーマパークを事例にして、計画や管理における周到な戦略の必要性を述べている。つまり、計画は、公的にせよ、私的にせよ、それに関与する機関や組織

が密接に連携することが不可欠であり、観光客の受け入れでは、受け入れに対して定まった見解をもたずに、闇雲に観光客の増加のみを図れば、結果的には観光地としての評価が低下し、経営への障害となってくることを、多くに事例をあげながら説明している。アーバンツーリズムではないが、観光地の計画と管理に関しては、ドイツの例が紹介されている（事例研究3: ドイツにおける観光政策に関する組織の設置）。

このような観光地の計画や管理に関しては、アーバンツーリズムに限らず、日本でも観光客の入り込みに関するデータが不足している。ヨーロッパにおいても、信頼できる観光統計の確立が検討されているが、本書では、ヨーロッパ都市観光オフィス連盟（FECTO; Federation of European Cities' Tourist Offices）の観光統計に関する考え方とその方法が、くわしく紹介されている（事例研究4: FECTOによる観光統計の考え方と方法）。

「インフラストラクチャーの適合」では、アーバンツーリズムでは、当然のことながら、ツーリストの都市への流入と都市内部での行動において、とくに交通面での整備が問題であることを、「国際空港の整備」、「都市内行動に対する整備（事例研究5: ベルリンにおけるパノラマSバーンの運行）」にわけて、くわしく分析している。

「観光と他産業とのリンク」においては、ロンドンとパリの事例をくわしく紹介している。ロンドンのサウスバンクでは、産業遺産と文化遺産を復興し、さらに新しい施設を加えることによって、退廃した地区（サウスバンク）をよみがえらせ、アーバンツーリズムの発展を企画した。「古き良きロンドンの復活」をテーマとするこのプロジェクトは、ロンドンに新しいアーバンツーリズムの一つの拠点をつくったという（事例研究6: ロンドン・サウスバンクの再開発）。植民地時代の影響で、多くの移民がみられるパリで、エスニック街として知られるギヤルド通りの再開発によるアーバンツーリズムの発展も興味深い（事例研究7: パリ・ギヤルド通りのエスニックエリアの再開発）。

## 第6章: 観光の問題点

本章は、「天災・人災による（観光への）影響」、「経済のモノカルチャー構造への不安」、「文化の変質と押し付け」の3節からなる。ここでは、都市観光に限らず、ツーリズムを阻害するものや国内経済におよぼす観光の重要性、そして観光化による地域や民族固有の文化

の変質や、挙げ句の果てには破壊をも招く危惧について指摘している。

SARS やテロの事例をあげるまでもなく、観光は究極の平和産業であると評者は思う。国際観光は、いわゆる「見えざる貿易」といわれ、先進諸国をも含めて、観光は重要な産業たりうる資格をもっていることは、だれしも考えることであろう。とくに、輸出品目に乏しい国々や地域では、外貨獲得の手段として、ツーリズムへの期待が大きい。

筆者も述べているように、「観光に大きく依存する経済構造は、モノカルチャー経済に類したものである」。都市に関しても、同じようなことがいえるであろう。「アーバンツーリズムの内容的なキーワードとして文化への関心が大きい」が、改めて地域の固有の文化とはどのようなものか、地域の文化をどのように守り育てていくべきか、といった議論や検討が求められている」。

以上、本書の概略を紹介してきた。

本書は、「アーバンツーリズムとは何か」、また「都市におけるツーリズムのもつ意味」などを中心に、アーバンツーリズムの初学者向けにまとめられたものであるといえよう。アーバンツーリズムに関する多くの事例が取り上げられており、図や表が的確に配置され、「アーバンツーリズムへの関心を高め、理解を得るための皮切りとしたい」（序）という筆者の考えは、十分に読者に伝わるであろう。筆者のフィールドワークに裏付けられた写真、資料、各種のデータは、地理学者としての、面目躍如たるものがある。本書は間違いなくアーバンツーリズムを論じており、「都市の観光」ではない視点を示している。

しかしながら、評者は、本書を一読して、研究者の間で「都市観光」についての定義が充分ではないこともあり、アーバンツーリズムに関する研究が、グローバルにみても緒に就いたばかりであるとの印象をもった。

ところで、本書に啓発されて、書き留めておきたいことが、評者にはある。それは観光統計とガイドブックに関することである。

本書でもふれているが、多くの国では産業に関する詳しい統計があるが、一般的にみて観光統計は不十分である。観光産業は21世紀の重要な産業であるとの

見方は、世界的な認識であろう。産業として観光を考える場合にも、文化として観光を考える場合でも、統計資料が必要であるが、基礎的で、正確なデータが不足している。アーバンツーリズムについては、とくにその感を深くする。アーバンツーリズムを意識した統計の項目の設定や公表がアーバンツーリズムの振興には、どうしても必要である。たとえば、通勤や通学に対する統計は国家的な規模で整備されているが、都市内部の観光客が、どのようにルートをまわり、またその行動を作り出している源は何なのか、という素朴な疑問に答えるデータがない。この点に関しては、JNTOの外国人の観光ルートの調査などは、大いに参考になる。

また、かつては、出入国の際に、渡航先や渡航目的などを書き込む「日本人出入国および帰国記録」の提出が義務づけられていた。しかし、手続きの簡素化で2001年7月に廃止されたため、渡航先や渡航目的が把握できなくなった。

観光を国家政策とするならば、基準や項目を統一した観光統計を充実させなければならない。日本では、都道府県別にも観光統計があることはあるが、正確性に欠けるし、統一されてもいない。国家レベルでも、地方レベルでも、観光政策を立案したり、具現化したりするためにも、観光現象を明らかにするデータが必要で、国家レベルで取り組まねばならない時期にきていると評者は考える。

もうひとつ、それは旅行案内書、とくに外国人に向けた案内書の充実に関することである。

国内観光客が伸び悩むなかで、国際観光客の積極的な受け入れは、日本の観光地における重要な生存戦略のひとつであるが、いくつかの障害がある。それは高い物価、ことばや習慣の違い、カードによる支払い、情報の不足などである。

これらのうち、日本に関するさまざまな情報の不足は、大きな問題であるが、それらのいくつかは、すぐにも解決可能である。

たとえば、現在、日本を紹介したしっかりした英文の旅行案内書がない。

ガイドブックは、世界経済あるいは国民経済にとって由々しいくらいの大きさの価値とたくさんの人間とを移動させるための、まさにその意志決定のための情

報源である。日本の魅力を、海外に詳細に伝えるためには、ぜひとも必要である。とくに、都市観光にとっては、日本政府の「観光立国行動計画」が、「外国人がひとりで日本を歩ける」ことを実現するためにも、ガイドブックが必要である。アメリカ(USA)人は、「英語の通じる国にしか旅行をしない。」と業界では言われている。そのうえ、アメリカ国民の14%しかパスポートをもっていない(日本では、26%がパスポートをもっている)。国際観光客の流動は近隣諸国間で大きいことを考慮すれば、英語のみではなく、中国語、韓国語のガイドブックも必要である。観光宣伝のためのミッションをヨーロッパやアメリカに派遣しても、つまりは一過性の活動である。しかし、「読むに耐える」ガイドブックは、観光客誘致のためには、もっとも基本となるものであろう。

観光は究極の平和産業であり、旅行という体験を伴うので、国際理解を深めるためにはまことに有効な手段である。その国の国民だけではなく、とくに外国人からみれば、大都市はその国の玄関口であり、その国の顔である。訪れた人びとに、魅力を伝えられない都市は、住んでいる人びとにも魅力のない都市であろう。

雑誌「地理」が49巻7号(2004年7月)において「特集 都市の観光」を取り上げた。「都市の観光」と銘打ったので、都市の観光案内が主要な内容であったのには、違和感はなかったが、物足りなかった。大上段に振りがぶって、「アーバンツーリズム」というとき、評者などは、「都市における観光の意味」を追求するべきであると思うし、何かしら学問としてのツーリズムを想起してしまう。だから、アーバンツーリズムも定義しなくてはならないのであろう。

本書によって、アーバンツーリズムへの認識が深まることを期待する。

なお、アーバンツーリズムに関心のある方々は、以下の出版物もあわせて利用すれば、一層理解が深まるものと思われる。

「アジア遊学 51号 - 特集 観光の都市空間 -」・勉誠出版、2003年5月。

クリストファー・ロー(内藤嘉昭/訳)(1997):『アーバンツーリズム』。近代文芸社、328p。